学究の人　大平正芳君

水野正資

大平君は高松高商から私は予科から商大に進学したので、三年間一緒に学生生活を送ったことになるのだが、必須科目の講義がある合併教室で顔を合わせるという程度で、同学年なのは分かっていても名前などはお互いに知らなかった。ところが卒業前のある日、ある講義が休講になったのでたまたま調べものをしに図書館に行くと、人影のまばらな部屋の片隅で机の上に二、三冊本を並べて一心不乱にノートをとっている、丸顔で目の細い色の黒い男がいた。何という勉強家がいるものかというのが第一印象であり、その時名前を知らないまま、私は図書館を出て行ってしまった。これが私にとって最初の彼との出会いであり、後々まで学究タイプの大平君というイメージを植え付けたもとになった。第二のイメージは、昭和三十六年三月に卒業二十五周年記念行事が伊豆韮山の水宝苑で開催された時に形成された。同級生が多数集まり行事と宴会が取り運ばれた。地方回りをしていた私も伊丹（兵庫県）から参加したが、当時池田内閣の大番頭として一躍脚光を浴び始めた大平内閣官房長官が公務多忙のなかを車で駈けつけて皆をいたく感激させたのである。われわれ同級生と悠容迫らざる態度で交歓している大平君の挙措をかいまみて、私は颯爽としたステーツマンの出現という印象を受けたのであった。

私は四十年頃から三菱グループや如水会、三思会等で大平君を囲む会の末席を汚すようになったが、この頃の大平君の印象は円熟ぶりを示しつつあったものの、十年前と変わっていなかった。しかし昭和五十年に私が責任者の一人となって、たまたま丸亀市に工場進出することとなり、地元の人達と折衝、接触する機会が多くなって

気付いたことは、地方有力経済人並びに地方行政幹部等はもちろん、数多くの庶民の間に大平ファンの多いことであった。あらためて大平君の幅広い信望の厚さを強く印象づけられたのである。

第四の印象は、大平君の友情の深さである。昭和五十四年十二月中旬、当社とアメリカのウェスチングハウス社との技術提携五十周年を記念し、合わせて同社のカービー会長の日本の勲一等瑞宝章受賞を祝って、祝賀パーティーを開催した時のことである。このパーティーには財界、官界、関係取引先の有力者を招待したが、錦上花を添える意味から大平総理に出席をお願しておった。現職の総理大臣であり時期が予算編成時の秒読みの日程でもあり、情況としては甚だ無理であったが、当日開催時刻しばらくたって突如「今から行くから」と官邸から通知があった。私が出迎えながら多忙のなかわざわざ出席されたことに深謝し、ついでに祝詞をお願したところ早速応諾、三十分近くもスピーチをしてくれたのである。予想していなかったことだけに、パーティーは大変盛り上がり成功裡に終了した。後日談であるが、女婿の森田秘書官（現衆議院議員）が「水野さんに頼まれたので大平も断われなかったのですよ」とささやいてくれたが、私も大平君の深い友情の表われだと感謝している。

更に総理に就任された時、私が官邸にご挨拶にうかがって丸亀工場の近況を説明した時、黙って聞いていた大平君が「ひょんなことで総理になったよ」と、一言ポツンといわれたことに政治の複雑な局面を見たものである。大平君は政治家としては志半ばで急逝したことになり、未だやるべきこと余りに多くあったようで残念であるが、同時に、私情としてはなるべく早く政界を抜け出し、昔のイメージ通りの学究者となり、できれば母校の講師となって格調高く国際政治や外交史等の講義をするということこそが晩年の彼の本意ではなかったろうかと密かに推測するのである。そしてこのことが実はご家族を始めわれわれ友人にとっても大平君にさせてあげたい最善最良の道であったと思うのである。これは私だけの見はてぬ夢であろうか。

（三菱電機副会長）